

# 教科横断による協働プログラム

『私たちの生活とアフリカの生活の相違に気づき、そのよさを英語で表現しよう』

岡山市立京山中学校（代表者実践時）

竹島 潤（代表）・山本 清美・廣畑 浩・阿部 友彦・水島 有奏

対象学年（人数）：第1学年8クラス（293名）

教科：英語科・社会科（地理）・美術科・道徳における協働プログラム

★教科を横断して開発教育に取り組まれた竹島先生に、「他の先生を巻き込んだきっかけ」や「どのように巻き込んだのか」などについてお聞きしました！

## ★他の先生を巻き込んで取り組もうと思ったきっかけ

### 使命感

自身の教師海外研修の経験やそれをふまえた実践をすることに強い使命感をもっていました。

### 担当教科の授業をより豊かに

担当教科は英語です。言語はコミュニケーションの道具であり、自分の考えや思いがなければ宝の持ち腐れです。また、英語は国際社会におけるコミュニケーションの道具でもあります。英語の授業を通して海外にかかわることで、しかも自分の意見や思いをアウトプットできる場面や活動を工夫することで、英語の授業が豊かになります。

### 授業の効率アップと補完

生徒が英語で書いたり話したりするためにはインプットの情報が必要です。各国の文化や政治経済などの内情についての英文資料を読解するのは、その語彙や分量からなかなか難しいです。かといって、日本語資料を英語の授業で配布して取り組むのはおもしろくないし、時間が惜しい気がします。そこで、他教科と協働でできたらいいなと思ったのです。

それに、社会（地理）はともすれば生徒が用語を覚えるだけになり現実とつなげて考えにくいという課題、美術では鑑賞したことと現実のつながりをどうするかが課題でした。

### 生徒指導上の効果

私は担当する学年や学校の生徒指導上も、授業や勉強がエキサイティングなこと、いろんな教科の先生たちがチームとして取り組むことのよさを確信しています。生徒が学ぶことや授業そのものへのコミットメントを高められます。



苦労したことは…あまりないように思います（笑）。

何事も気合い！そして楽しむことかと。

## ★どのように他の先生を巻き込んだのか

### 積極的なアプローチ

各先生の興味・関心の分野に合わせて何度もアプローチしました。小生、もとより職員会議などでもよく発言する人間ですし、ポリシーを持って生きております。“押しが強い”とか“断りにくい”などと思われる方もおられるかもしれません。今回協働してくださった方は、もっと崇高な理由で協働してくださいましたよ！！

### 共通の視点

ESDの視点で授業改善することを学校全体で研究テーマにしていたので、共通理解もしやすかったように思います。

### 全体計画は仕切る

時間割変更の案、プログラムの順番など全体にかかわることは基本的にすべてこちらで（案）を作成しました。

### 詳細はご意見やご助言を聞いて、活かす

折に触れ、生徒の反応や授業しての感触をお互いに情報交換し、小さな改善に努めました。

### 情報共有をこまめに

共有フォルダに授業風景の写真を入れて見えるようにしたり、ワークシートや生徒作品はお互いに見せ合ったりしました。

## ★どのように授業計画・授業実践を進めたのか

- ・ESDの視点で教材、人、能力態度のつながりを意識すればだれでもできると思います。
- ・とにかくみんなやることが多いので、要領よくやることを心がけました。現在取り組んでいることとのつながりを活かす、ワークシートや授業の流れなどは案で出すなど。
- ・打合せは短時間かつ必要最小限を常に心がけています。
- ・計画、実践する中で気づいてくるものだと思います。とにかく「実践ありき」だと思います。

### ★竹島先生のご感想

- ・どの先生方も基本的には、熱い思いや使命感、そして子どもや学ぶことが好きな方ばかりだと思っています。それがさまざまな日々の業務で多忙となり、新しいことへの意欲や挑戦の心がおとなしくなっているように思います。教科横断の取り組みは先生たちの連帯と意欲再燃につながると考えています。
- ・世の中のことはすべて、いろいろな人はお互いによさを発揮して協力しないと進まないと思います。授業づくりもそうしたことのひとつ。よって、みなで協働するのは当たり前というか、そのほうがおもしろいし効果もあるのに、なんでしないのかな？めんどくさがるのかな？と思っています。

## ★協働した先生方の感想

### どんな形なら巻き込まれ(取り組み)易いか

- ・ どういう協力を求められているか、目的や内容、流れ等、明確な提案がなされること
- ・ 協力を求められた側の希望や提案について、相談の余地があること
- ・ 授業の目的が協力する各教科、各先生の目的と合致していること  
(我々の場合は、ESD の視点が根底にあったので、より繋がり易かった)
- ・ 全体のビジョンが分かること
- ・ 子どもにつけたい力の明確さ
- ・ 校内の設備を整えること
- ・ 教材の魅力があること

### ハードルになること

- ・ 時期的な問題。教育課程の縛りを受けるため、同じ時期にどうしてもできないプログラムがあって、もったいなかった。関わる教員の意識にもよるとは思いますが、でも、そのハードルは高いと思います。
- ・ 新しいことをやることへの抵抗感
- ・ 個人個人の教育観、教材観のちがい
- ・ やることによって子供の発達・成長が見えるか見えないかわからないこと

### 教科横断型の取り組みは実際どうだったか

- ・ 単独では深まりきらない学びをより深く生徒の内面に湧き起こすことができた。
- ・ 連携の難しさを感じた。美術英語社会道徳の様子を共有することが大変だった。
- ・ 生徒が単に受け身ではなく能動的に興味をもち、生徒自身の経験や知識、興味関心を総動員して、課題に喰いつき、自分の力で解決していこうとする気持ちになれた。一方通行ではなく、生徒がやる気をもって授業に取り組むことができる工夫が随所になされていた。今度の教育課程の核にアクティブラーニングがあると認識していますが、まさにその取り組みと言えらると思う。
- ・ 私自身は、担当の美術科で取り組んでいる対話鑑賞が、単独では生徒の勝手な読み取りだけで終わり、「本当はどうなんだろう」「自分たちの考えや見方は正しかったんだろうか」といった成功すれば成功したほど強く抱く授業後感に、教科の特性故に応え切れていない部分を、美術科とは離れたところで補い深めてもらえる点について、とてもよかったと思っています。取り組む以前にはそこまでの効果には気づいていなかったと思います。多くの美術教員は、そこまでを含めて美術科ですればよいと考えるであろうと思いますが、私は、そこは美術科の範疇外であるという強いこだわりがあるので、殊更、行った連携について美術科単独では成し得なかったことだと実感しています。
- ・ 深化（教材・教育観）ができた。